

論 説 (1)

論 説

不覚の「南京占領」研究
——法廷論争を十年ぶりに振り返る

東 中 野 修 道

目次

- 1 8歳の少女A ≠ 原告シア氏 (拙著)
- 2 2家族殺害「2人」生存 (無声映画「解説」)
フィルム
- 3 数え年9歳 = 満7～8歳 = 満8歳の少女A = 原告シア氏 (地裁判決)
- 4 少女A ≠ 「シア夫人の兄」の姪、即ち少女A ≠ シア家の子 (無声
フィルム映画「解説」)
- 5 家族「3人」生存 (原告の最初の証言)
- 6 「目撃者は実際に見たものと後から言われたものとを自然に折衷し
ている」
- 7 一家全員皆殺し (無声映画「字幕」)
フィルム
- 8 およそ妥当とは言い難い地裁判決文の削除

オーストリア＝ハンガリー帝国のショプロンは第一大戦後の住民投票でオーストリア領からハンガリーに帰属となった小さな町である。人口6万の、ウィーンとブダペストを結ぶ幹線道路の上に位置する国境の町が、1998年の夏には、東ドイツ市民「大脱出」の最前線となった。国境沿いの鉄のカーテンが切断されていたからである。その一片を研究室に持ち帰ってから2か月後の11月9日、ベルリンの壁が崩壊した。日本が社会主義化する危険はこれで消えたと思った。と同時に、社会主義崩壊の悪夢を前に、日本の社会主義者たちはこれからどうするのか、おそらくあの戦争の批判に活路を見出し、とりわけ南京虐殺の喧伝に力を注ぐのだろうと、私は反問していた。そこで翌1990年（平成2年）から南京占領の研究に少しずつ取り組み始めることとなった。東ドイツ社会主義研究の2冊目を書き終えた1994年末からはこの研究にのみ没頭して、ようやく1998年に処女作の『「南京虐殺」の徹底検証』（展転社）を世に問うことができた。

1 生き残りの少女A≠原告シア氏 (拙著)

それから2年、平成12年(2000年)11月末に、私は中国の南京で被告として提訴されたことを、日本の全国紙や地方紙を通じて知らされる。それから更に3年半後、その「民事訴状」が南京市中級人民法院(南京地裁)から東京地裁を通じて、出版社や私に届いた。外交ルートを通じて、正式に訴状が送られてきたのである。

1938年当時の記録によれば、南京陥落当日の12月13日、家族が日本軍に殺され、自らは負傷しながらも生き残ったと記録された少女がいた。後述するように原告シア氏はその少女だと証言して、南京陥落から約50年後の1985年(昭60)に初めて公に出てきた人であった。

南京で殺人や略奪を見たと言って1980年代から出てきた証言者は日中両国に少なくない。その証言も研究者にとっては一つの史料となる。当然、その一つ一つをあるゆる史料に基づきながらあらゆる角度から考察して、整合性のある解釈を追究していく必要が生じる。証言も史料批判の対象となることは避けられないのである。

しかし多くの場合、その裏付けとなる当時の記録がないため、検証は極めて困難というのが実情であった。ところが原告の証言する事件はたまたま当時の記録が存在していたため、戦後の証言と、戦前の記録との比較検討が可能となった。そこであえて検証に踏み込んで、原告は生き残りの少女とは「別人と判断される」「原告は事実を語るべきである」というふうに原告の証言に疑義を呈して、『「南京虐殺」の徹底検証』(248頁)に書いた次第である。それが原告にたいする「名誉毀損」にあたるという訴状が、2003年(平成15年)6月30日付けで届いたのであった。

2 2家族殺害「2人」生存フィルム(無声映画の解説)

それは次のような連続殺人事件であった。当時南京にいて国際委員会のメンバーであったジョン・マギー牧師が書いたと言われる記録から引用する¹⁾。

Film 4) 事例9。

12月13日、約30人の兵士が南京の東南部の新路口5のシナ人の家に来て、中に入れるよう要求した。

玄関を、ハー (*Ha*) という名のイスラム教徒の家主が開けた。すると直ちに彼らはハーを拳銃で殺した上、もう誰も殺さないでと、ハーの死後^{ひざまず}跪いて頼むシア氏 (*Mr. Hsia*) をも殺した。なぜ夫を殺したのかとハーの妻が尋ねると、彼らはハーの妻をも殺した。シアの妻は1歳の赤ん坊と客間のテーブルの下に隠れていたが、そこから引きずり出された。そして一人かもっと多くの男から裸にされ、強姦されたあと、銃剣で胸を刺されて殺された。その上、陰部に瓶を突っ込まれ、赤子も銃剣で殺された。

それから何人かの兵士が隣の部屋へと行った。そこにはシアの妻の76歳と74歳になる両親、それに16歳と14歳になるシアの娘がいた。この娘たちを彼らが強姦しようとしたその時、祖母が娘を守ろうとして拳銃で殺された。祖父が妻の体をつかむと、祖父も殺された。

無声映画の「解説」に基づく家族構成

家主ハー家	①夫 ②妻 ③ 4歳 ④2歳
同居シア家	①祖父76歳 ②祖母74歳 ③父 ④母 ⑤16歳の娘 ⑥14歳の娘 ⑦ 7～8歳の少女 ⑧1歳
生存者	① 8歳の少女A ② 4歳の妹
関係する人物	① シア夫人の兄＝親戚 (a relative)

それから二人の少女が裸にされた。上の少女は2、3人に強姦され、下の少女は3人に強姦された。そのあと上の少女は刺されて陰部に棒を

1) 『『南京虐殺』の徹底検証』では先行研究に従って「マア」(*Ma*) と訳した姓が、今日では「ハー」(*Ha*) と認識されているので、本稿ではそれに従っている。また「*The photographer*」は意識に過ぎたので、本稿では逐語訳している。そしてまた「シアさんの弟 (又は兄、*Mrs. Hsia's brother*)」は単に「シア夫人の兄」と短く簡略化した。

突っ込まれた。下の少女も銃剣で突き殺された (*bayonnetted*) が、母や姉の受けたぞっとするような扱いは免れた。

それから兵士たちはもう一人の7、8歳になる妹も銃剣で突き殺した (*bayonnetted*)。同じくその部屋にいたからである。

この家の最後の殺人は4歳と2歳になるハーの二人の子供(訳注、性別不明)の殺人であった。上の子は銃剣で突き殺され (*bayonnetted*)、下の子は刀で真二つに斬られた。

その8歳の少女 (*the 8-year old girl*) は傷を負ったあと母の死体のある隣の部屋に這って行った。無傷で逃げおおせた4歳の妹 (*her 4-year old sister*) と一緒に、この子はここに14日間居残った。この二人の子供はふかした米を食べて生きた。

写真撮影者 (*The photographer*) が、この話の一部を得ることができたのは、上の8歳の少女からで、詳細は一人の隣人 (*a neighbor*) と一人の親戚 (*a relative*) から語ってもらって、確認と訂正ができた。

兵士たちは毎日この家に物を取るためやって来たが、2人は古い敷布(シーツ)の下に隠れていたので発見されなかったと、この8歳の少女は語った。

このような恐ろしいことが起り始めた時、近所の住民はみな避難民地帯に逃げた。それから14日して、このフィルムに出て来る老女 (*the old woman*) が近所に戻って、2人の子供を発見した。その後、死体が全て取り除かれたあとの部屋に、写真撮影者を案内したのは、この老女であった。彼女や、シア夫人の兄 (*Mrs. Hsia's brother*) と、この小さな女の子 (*the little girl*) にたいする質問を通じて、恐るべき悲劇についての疑問の余地なき理解が得られたのである²⁾。

2) 翻訳の底本としたのは、Deutsche Gesandtschaft/Botschaft in Nanking, *Japanisch-chinesischer Konflikt: Dezember 1937-Januar 1939* (Mikrofilm). Bundesarchiv-Abteilungen Potsdam, S. 153~S. 160. であるが、この無声映画^{フィルム}の「解説」は今ではZhang Kaiyuan (ed), *Eyewitnesses to Massacre: American Missionaries bear witness to Japanese Atrocities in Nanjing*, New York: M.E. Sharpe 2000, p. 209f. に見ることができる。

冒頭に「Film 4」とあるように、これは無声映画の16ミリフィルムフィルムのなかの一コマにかんする解説であった。本稿では、これを無声映画の「解説」と呼ぶことにする。一方、登場人物は一般に小説でも姓名を付せられているが、ここには一つもないため、中心的に解説されている8歳の少女を「少女A」と呼ぶことにする。

3 数え年9歳＝満7～8歳≡満8歳の少女A＝原告シア氏 (地裁判決)

これが事実とすれば兵士30人による連続殺人事件であった。家主のハー夫婦から始まって、シア夫婦、その1歳の赤子、そして妻方の祖父母が殺され、16歳、14歳の娘、7、8歳になる妹が銃剣で突き殺され(bayonetされ)、「最後の殺人」がハー家の4歳と2歳であった。難を逃れたのは8歳の少女Aと4歳の妹の二人だけであったという。

殺人事件の記述は最初の殺人から「最後の殺人」までと解釈した私は、その間の「bayonet」を、「剣で突き殺す」と解釈した。そうすると、「7～8歳のシア家の子」は銃剣で突き殺されたことになるとしても、「8歳の少女A」は両家のどちらに属するのか。双子ならば、両者はシア家の子となるが、双子とは明記されていなかった。しかも一家に同年齢の子は二人とはいえない。「シア家に7～8歳の子がいる」以上、「少女A≠シア家の子」ということになり、家主ハーの子と考えた³⁾。そこで、「シア家の子ではない少女A」は「原告のシア氏」とは「別人」と判断した次第であった。

原告側弁護団はこれにたいして、私が「bayonet」を「銃剣で突き殺す」と解釈したのが「基本的な誤り」だと力説する。原語の「bayonet」には「銃剣で突き殺す」のほか第二の語釈「銃剣で突く」の意味があるから、

3) 一読しても家族関係が判然としないよう、この「解説」は注意深く書かれている。8歳の少女Aは家主ハーの子とここには記したが、そうとも言えないのである。と言うのは、8歳の少女Aには「無傷で逃げおおせた4歳の妹」(本書3頁25行目)がいた。しかも家主ハーにも「4歳と2歳になる……二人の子供」(本書3項21行目)がいた。双子でもない限り一家に同年齢の子は二人としないから、「8歳の少女Aとその4歳の妹」は家主ハーの子とも言えない、と考えるのが当を得ているのであろう。

「bayonet」とは兵士たちがもう一人の「7～8歳の子」を「銃剣で突いた」という意味であり、銃剣で突かれながら生き残ったシア家の「7～8歳の子」が「その8歳の少女A、すなわち原告のシア氏」と主張したのであった。

その結果、第二の語釈の「銃剣で突いた」が判決に採用された。8歳の子はシア姓と判定されたのである。

マギーは……中国式数え方で9歳（a girl of nine）と説明した少女の満年齢^{フィルム}を「7、8歳」と推定し、フィルム解説文（注、本稿で言う無声映画の「解説」）では、これを「8歳の少女」（the 8-year old girl）と表現したことも十分考えられるところであり……そのように理解するのが合理的というべきである。（平成19年11月2日、東京地裁判決書27頁）

訴訟は南京のほか東京の裁判所でも行われ、東京地裁と高裁の判決は、著者の私や出版社には原告を誹謗中傷せんと「悪意」（高裁判決書5頁）は認められないにしても、「誤読」が名誉毀損を招いた以上、総額400万円を分担して支払えとの判断が下された。

4 少女A≠「シア夫人の兄」の姪、即ち少女A≠シア家の子^{フィルム} （無声映画「解説」）

果たしてそうであったろうか。ここでは無声映画^{フィルム}の「解説」の問題点を2点に絞って指摘しておきたい。

まず「解説」に出てくる「親戚」（a relative）はどう解釈すればよいのか。本書4頁3行目の「親戚」（a relative）は「シア夫人の兄」を指していた。不定冠詞が使われている以上、登場人物の誰その親戚とは特定されない、それゆえ少女Aの親戚とは特定できない関係にあった。

そこから次の結論が出てこよう。シア夫人の兄は少女Aの「親戚」すなわち「^{おじ}伯父」とは特定されなかったのだから、「少女Aはシア家の子ではなかった」、という結論が。

しかしそうではなく、逆に、「シア家の少女A」という逆の仮定に立ってみるのもよい。その時、「シア夫人の兄」は「シア家の少女A」の親戚であることが明白だから「彼女の親戚」、すなわち *her relative* または *a relative of*

*hers*となる。不定冠詞の*a relative*とはならないのである。

同じことが次の一文からも言えよう。

無声映画の「解説」の末尾には、「シア夫人の兄 (*Mrs. Hsia's brother*) とこの小さな女の子 (*the little girl*) にたいする質問を通じて」(本書4頁23行目)と記されている。もしこの小さな女の子 (*the little girl*) がその前の *Mrs. Hsia* と親子関係にあったとすれば、*her little girl* または *the little girl of hers* と記されて当然であった。*the little girl* である限り、少女Aがシア夫人の子であるとは特定できない、シア家の子であったとは言えない、という結論になろう。

それは、第一の語釈「銃剣で突き殺す」(*bayonet*) から導き出される「8歳の少女Aはシア家の子ではなかった」という結論と、ぴったりと一致する。

一方、第二の語釈「銃剣で突く」から導き出される「8歳の少女Aはシア家の子であった」という結論は、「親戚」(*a relative*) の文脈から導かれる「8歳の少女Aはシア家の子ではなかった」という結論と、矛盾することになる。

このような論理的家族関係からすると、

「8歳の少女A≠シア家の子」

と解釈するのが合理的と言うべきなのであろう。地裁判決のように「8歳の少女A＝シア家の子」と特定する根拠はどこにもなかった。拙著の解釈(本稿の目次1)は間違っていなかったのである⁴⁾。

もう一つの問題は「祖母」にあった。この「解説」は、シア家の「祖母」(本書3頁14行目)は殺されたと解説していた。つまり死者となっていた。ところが16ミリフィルムの無声映画には、第一発見者としての「祖母」(本書12頁5行目)が出てくる。つまり生者であった。いったいどうして生者を死者とする錯誤を、無声映画の「解説」は犯したのか。その理由はやがて明らかとなろう。

5 家族「3人」生存(原告の最初の証言)

偶然、私は、鹿児島45連隊の参戦者浜崎富蔵氏(戦後は鹿児島市警察署長)から頂いた新聞記事の切り抜きを保存していた。それが「南京大虐殺生存者の証言——日教組訪中団が報告書」という記事であった。昭和60年

7月11日に鹿児島の『南日本新聞』に出た記事だが、同社データベース部の回答によれば「共同通信の配信記事」であったようだ。これが管見では原告の最初の証言を伝えていた。

私の家族は9人のうち7人まで殺されました。日本の兵隊はいきなり父を銃殺し、盲目の祖父を虐殺した。そして当時、8歳の私の目の前で、母と16歳、14歳の姉を裸にして乱暴、その後すぐ殺した。小さい妹は地面にたたきつけられて死んだ。私は2人の妹を連れて逃げ、死体の山の中に埋もれて15日間隠れていた。虫の息の中国人が殺されたとき、私も3カ所傷を受けた

4) 滝谷二郎『目撃者の南京事件——発見されたマギー牧師の日記』（三交社、平成4年）は、マギー師が8歳の少女Aについて、「家主ハーの8歳になる娘は重傷を負いました」（86頁）と記していたことを示している。しかし裁判長は「原文の資料が証拠として提出されていない」（地裁判決書26頁）という理由のもとにこれを却下した。

確かに、原文が有れば有ったに越したことはないであろう。それによって「家主ハーの8歳の少女」という解釈の妥当性が再確認され、原告弁護団の「少女Aシア姓」説は一挙に揺らぐからだ。十数年前に出版社を通じて私は入手の努力を試みたが、無駄に終わった。

しかし果たして英語原文は必要不可欠だったのであろうか。原文がなくとも「家主」「ハー」の8歳の少女と書かれていることから判断すれば、そしてまた滝谷二郎氏が『目撃者の南京事件』を刊行する10か月前に「〈マギー牧師の日記〉が証言する旧日本兵の暴力」においても「**家主ハーの8歳になる娘は重傷を負いましたが……**」と太字にして引用していることから判断すれば、誤訳の可能性は無いに等しいと言わねばならない。しかも「家主ハーの8歳になる娘」であったればこそ、「8歳の少女A≠シア家の子」という家族関係の論理的帰結とも矛盾しないのである。

これをしも誤訳と言うのであれば、そう主張する原告弁護団に立証責任があった。ところが裁判官は被告側に立証責任を転嫁した。そうしなければ「少女Aのシア姓」説が根底から揺らぐと見たからであろう。初めから結論ありきの裁判であった、と言っては言い過ぎであろうか。滝谷二郎「〈マギー牧師の日記〉が証言する旧日本兵の暴力」（*Views*, 平成4年[1992年]2月、2巻4号）137頁を参照のこと。

本稿冒頭（4頁10行目）の無声映画の「解説」と比較すると、太字部分があまりにも違う。「私は2人の妹を連れて逃げ、死体の山の中に埋もれて（注、3人で）15日間隠れていた」のではなく、「私は一人の妹と2人で古い敷布の下に隠れていた」と、無声映画の「解説」は解説していた。しかもこの証言では私の家族は「9人」ではなく、死者「7人」と「私」と「2人の妹」を合わせた10人となる。（注、この数字は「bayonet」を「銃剣で突き殺す」と解釈した場合の総数と一致する）。

このような数字の齟齬はひょっとして「共同通信の配信記事」の誤植かとも一応は疑われたので、日教組訪中団の報告書を探し出して照合してみると、共同通信の配信記事は「盲の祖父」と「盲の祖母」の違いを除けば正確な記事であった。その日教組訪中団報告書が次である。

南京での虐殺は30万人に達した。その殺されかたはさまざまだった。私の家族は盲の祖母、それに父と母、16歳の姉をかしらに全部で9人だった。そのうち7人まで殺された。侵入してきた日本の兵隊はまずいきなり父を銃殺し、そして盲の祖母を虐殺した。そして、当時8歳の私の目の前で、母と16歳、14歳の姉を裸にして強姦し、その後すぐに殺した。小さい妹は地面に叩きつけられて虐殺された。私は2人の妹をつれて、隙をみて逃げだし、死体の山の中に埋もれて15日間かくれていた。虫の息の中国人を銃剣でさし殺すとき、私も3ヶ所の傷をうけた

助けられたときは死人同然に衰弱していて、意識は全くなかった。意識をとりもどして今でも脳裏にやきついているのは、空地といわず私の周囲は死体の山で埋まり、それがガソリンをかけられて無残な炎に包まれていたことであった。私は要求する。戦争は過去のものとなったが、永久の平和が実現することを。そして生存者の一人として、中国共産党、中国人民政府に心から感謝したい⁵⁾

本多勝一氏の取材⁶⁾に先立つこと2年前の、1985年（昭60）4月3日の

5) 日本教職員組合教育文化局編『日本と中国との教科書研究——第1回日教組・中国教育工会教科書研究交流会報告書』日本教職員組合、昭和60年、83頁。

証言であった。よく「秘密の暴露」と言われるように、最初の証言には一般に知られていない事実、すなわち当事者しか知り得ない秘密の事実が吐露されているものである。それがすでに指摘した「2人の妹を連れて逃げた」であった。そして「空地といわず私の周囲は死体の山で埋まり、それがガソリンをかけられて無残な炎に包まれていた」であった。

6 「目撃者は実際に見たものと後から言われたものとを自然に折衷している」

このように、死体の山にかけられたガソリンが15日間も燃えていたという事件を、南京城内の事件として誰が指摘できるであろうか。かと言って、証言の信憑性は疑いようもない。証言者は南京城内の「新路口5」(本書3頁冒頭)ではなく「城外」で起きた事件に遭遇していたのであろう。しかも難を逃れた妹は無声映画フィルムの「解説」では「一人」であったが、上記の最初の証言では「2人」と証言されていた。基本的な家族構成も全く違うことから、原告は無声映画フィルムの「解説」の言う事件とは違う事件に遭遇していたと考えるのが、合理的と言うべきなのであろう。

このように証言者の脳裏に焼き付いた光景は、「助けられたとき死人同然に衰弱していた」とはいえ、当時の記録とはまるで一致していなかった。もし目撃者がその後になって最初の証言と一致しない「解説」の情報を得た場合、どんなことが起こるであろうか。「どうやらかなり多くの目撃者は実際に見たこととその後伝え聞いたことを折衷させているようだ」と分かる」と、古典的なエリザベス・ロフタスの『目撃者の証言』⁷⁾は言う。これに従えば、原告のその後の証言は、実際に見たことと後から無声映画フィルムの「解説」を基に指摘されたこととを折衷させているようだ、と解釈するのが合理的

6) 洞富雄・藤原彰・本多勝一『南京大虐殺への現場へ』(朝日新聞社、昭和63年)、本多勝一『南京への道』(朝日新聞社、文庫版、平成元年)、ならびに南京事件調査研究会編『南京事件調査報告書』(一橋大学吉田研究室、昭和60年)を参照のこと。

7) エリザベス・ロフタス『目撃者の証言』、西本武彦訳、誠信書房、57頁、59頁。Elizabeth F. Loftus, *Eyewitness Testimony*, Massachusetts: Harvard University Press, 1979, 1996, p. 56, p. 58. 訳文は西本訳を仰ぎながら一部変更している。

な解釈となろう。

7 一家全員皆殺し（無声映画「字幕」）

これまで無声映画の「解説」のなかの少女Aの姓を論証したあと、秘密の吐露を含む原告の最初の証言と無声映画の「解説」との異同を明らかにしてきた。そこで残るは、無声映画の「解説」の元となった無声映画（16ミリフィルム）の字幕説明のみとなった。その存在の決定的重要性を、誰もが、私を含めて等閑視してきたのである。

そもそも無声映画の「字幕説明」と無声映画の「解説」とでは天と地ほどの違いがあることは、今でも根強い人気のある名画、たとえば「黄金狂時代」の字幕説明とその解説との食い違いについて考えてみれば分かることである。

チャールズ・チャップリン監督主演の「黄金狂時代」(*The Gold Rush*, 1925)は無声映画であったから、私たちは字幕説明と、それを基に俳優の演じる演技を手がかりにして、各場面を理解することになる。チャップリン演じる、一攫千金を夢見る「山師」がもう一人の「山師」と偶然出会う、ついに「億万長者」になるという、悲喜こもごもの、何とも笑いを禁じ得ない名場面が続くが、一攫千金を採し当てたのは一人でも3人でもなく（字幕説明と場面によれば）この2人であった。2人が大金持ちの「億万長者」(Multimillionaire)となったのであって、それ以上でもそれ以下でもなかった。もし誰かが、2人ではなく「3人」が「百万」長者になったと解説すれば、「それは違う」と、誰もが異議を唱えよう。無声映画にあっては、字幕説明こそが各場面の唯一無二の判断基準となるからである。

同じことが無声映画の16ミリフィルムについても言える。次の二つのうち、最初が「マギー撮影フィルム」と言われる16ミリフィルムの字幕説明で、次が「マギー撮影フィルム」の多くを収録していると言われる「チャイナ・インヴェイディッド」の字幕説明である。

この一家全員 (*This entire family*) が日本軍が入城してきたとき日本軍に虐殺された。女性のうち二人はレイプされてから殺された。……そのうちの一人は実に恐るべき方法で。(This entire family was massacred by

the Japanese when they entered the city. Two of the women were raped and then put to death…… one of them were in a particularly horrible fashion.)

祖母 (*A grandmother*) が帰宅すると、祖母の一家全員 (*her entire family*) が虐殺される。目撃者たちは祖母の二人の娘 (*her two daughters*) がレイプされ、手足を切断され、無残にも殺されていたと報告している。(A grandmother returns home, her entire family massacred. Eyewitnesses report her two daughters raped, mutilated and horribly killed.)

この字幕説明が正しいとすれば、「一家全員皆殺し」の事件であった。しかし「一家」の姓も、人数も、年齢も、そこに見ることはできない。言及されているのは、帰宅して第一発見者となった「祖母」と、レイプされ手足を切断されて無残にも殺された2人の「祖母の娘」のみであった。祖母を除く一家全員が殺され、生存者ゼロの事件であった、というのである。余談ながら、2人の娘が手足を切断されたという凄惨な事件が南京城内で起きていたであろうか。寡聞にして、私は知らない。

字幕説明から分かることはそれだけであった。それ以上でもそれ以下でもなかった。

従って8歳の少女Aが「この一家」の一人であったかどうか不明であったが、仮にそうだとすると死んでいたのだから、戦後、誰であれ、その少女Aですと証言できるはずもなかった。「死んだ少女A」と「生きている証言者」は別人というのが、死者と生者との関係から必然的に生じる論理的帰結となる、と考えるのが自然であろう。それ以外に果たしてあったであろうか。

そうではなくて、冒頭(本書3頁)に紹介した^{フィルム}無声映画の「解説」のように、「2家族」が襲われ、「祖母」は殺され、「祖母の孫娘」も^{むこ}酷い殺され方をされたが、2人の少女は生き残ったのだと言いたければ、そう言ってよいであろう。しかしそれは字幕説明から逸脱した解説である以上、無いことを有るかのように作りあげた作り話となる、ということを忘れない方がよい。「字幕説明」が「元」となるべき「根本資料」であり、「解説」は「控え」ないしは「写し」としての「参考資料」であったからだ。「解説」は「字

幕説明」の悪質な拡大、改竄^{かいざん}ということになる。「おかしいじゃないか、死者が生き返ることはない」と気づいて——南日本新聞の記事を除いてこれらの資料を私が裁判所に提出した陳述書に記載した段階でいち早く気づいて——指摘しておくべきであった。字幕説明を改竄した無声映画の「解説」を基に論じるのは、愚の骨頂と知るべきであった。私たちはあまりにも無声映画の「解説」のみを論じ過ぎた。枝葉末節の「副」を見るばかりで大本の「正」を見ようとはしなかったのである。

そこで参考までに両者の異同を一覧表にすれば次のようになる。

	被害者	生存者	姓	少女A	祖母	16歳 14歳
<small>フィルム</small> 無声映画「字幕」	一家全員死亡	ゼロ	ナシ	死亡	生存	祖母の 娘
<small>フィルム</small> 無声映画「解説」	2家族12人	2人	ハーとシア	ハー姓	死亡	祖母の孫娘
原告シア氏	9人中7人	3人	シア	私8歳	死亡	祖母の孫娘

このように全面的に改竄された無声映画の「解説」は歴史学上の史料とはなりえない。刑事訴訟法上の物的証拠^{キヤブシヨン}ともなりえない。字幕説明に基づいて抜本的に修正されねばならないのである。無声映画とその「字幕説明」が正しいとすれば、それが事件の存在と様態を示す「唯一無二の物証」であったからだ。

8 およそ妥当とは言い難い地裁判決文の削除

十年ぶりに法廷論争を振り返りながら定年退職を前に私なりに整理すると以上のことが想起されてくるが、この回想的論文を閉じるにあたって、最後に、次の地裁判決の一文を記録に留めておきたい。

東中野の原資料の解説はおよそ妥当なものとは言い難く、学問研究の成果というに値しないと言って過言ではない。（地裁判決書30頁11行目から13行目）

言葉の乱れと学力不足が指摘されて久しいが、『国語大辞典』（小学館）や『広辞苑』（1988年版）を持ち出すまでもなく、「過言」という言葉は「……

(14) 不覚の「南京占領」研究

と言っても過言ではない」というふう^にに用いられる。地裁判決のように「……と言っても過言ではない」とは、一般には言わない。注意すべきであろう。

改めて再確認するまでもなく、十年前の法廷論争は「〈8歳の少女〉と□□とは別人と判断される」、従って今日の私の研究結果から言えば「死んだ8歳の少女Aと生きている証言者は別人である」という一文の、当否を焦点とするものであった。私の研究が「学問研究の成果」にあたいするかどうか^がが論争的となったことは一度もなかった。そもそも或る研究が学問研究にあたいするかどうか、それを判定するだけの専門知識が——どの研究分野も極めて細分化され深化しているだけに——裁判官にあると思えない。それどころか、司法権という国家権力が何々の研究は学問研究にあたいするかどうかを判定するようになれば、学問研究の自由は全体主義国家においてのように一気に窒息していく。しかも裁判官としてはそんなことは書かずとも、裁判官なりに過不足のない判決が十分に書けたことであろう。厳正中立な審判をモットーに、何色にも染まらないことを肝に銘じるべく「黒衣」をまといながら、そしてまた人権を誰よりも尊重すべき職責にありながら、三千川三千代裁判長、藤本博史裁判官、兼田由貴裁判官が、判定するまでもない（或いは判定できようもない）書かずもがなのことを判決書^{おとし}に書いたのは、越権行為に近かった。私の〈南京占領〉研究を、ちょっと貶めておきたかったからとしか思えない。穿^{うが}った見方であろうか。

そのように、東京高裁が判断したかどうかは分らない。ともかく、高裁判決は地裁判決文の上記部分「学問研究の成果」云々の削除を命じた。

30頁11行目〈およそ〉から13行目までを「不合理であって、妥当なものということができない。」に改める。(平成20年5月21日、高裁判決書4頁)

医者の「誤診」は患者の生命に関わり、裁判官の「誤審」は研究者生命を左右しかねない。平成20年（2008年）現在で約20年間、毎日研究に取り組んできた研究者の努力と人格を、冷笑するものであった。しかも「覆水盆に返らず」で、高裁判決が削除した上記の地裁判決がインターネット上に駆け巡っている。

(平成29年10月24日脱稿)